

研究ノート

幼児のスポーツ参加と両親の影響 (第1報)

——両親のスポーツ関心と

教育熱からみたその地域的な比較——

丸 山 富 雄

はじめに

東京オリンピック後、わが国では幼児・児童を対象とした各種のスポーツ教室、たとえば市町村主催のスポーツ教室や体協のスポーツ少年団、民官企業のスイミングスクールや体操教室などが、その経営主体や経営目的の如何に拘らず、年々盛んになってきている。この現象は、一方で、核家族化、遊び場の減少、遊戯集団の崩壊など子どもをとりまく物理的、社会的環境の悪化と、それに伴う心身両面への悪影響という危機意識から生じたものであろう。また、他方では、このような子どもをとりまく社会環境の変化やわが国スポーツ界の現状を先取りし、健康・体力づくりからスポーツの英才教育を謳うスポーツ産業の存在や、社会体育の普及振興を掲げる自治体の政策が考えられる。しかし、幼児・児童のスポーツ教室の繁栄は、直接的にはその両親の積極的な意識が支えとなっている。この両親の意識に関して、上柿<sup>9)</sup>はこれら「スポーツ塾」を支える「スポーツママ」の熱狂ぶりに批判を込めた論評をしている。また西野<sup>5)</sup>や永吉ら<sup>4)</sup>も同様に、ラグビースクールやスイミングスクールの入会動機から、子どもの心身両面での親の期待を報告している。これらの報告からもわかるように、意識の稀薄な幼児、児童の場合、直接的なスポーツ参加は両親の積極的な関与と励ましが最初の出合いを決定し、その後の継続を左右する非常に重要な要因であると言える。

一般に、「スポーツへの社会化」は、ある役割素質を持った個人が子どもの頃から成人に至る各ライフステージにおいて、スポーツに関する社会的状況(家庭、学校、仲間集団、コミュニティ)や、重要な他者(両親、兄弟、友人、教師などの社会化エージェント)の影響と相互連関しながらスポーツ役割を学習していく<sup>2)</sup>、というモデルによって説明されている。Spreitzerら<sup>7),8)</sup>は、社会化エージェントとしての家族の影響を重視し、パス分析によって、両親のスポーツ関心・励ましが、子どもの頃のスポーツ参加、競技能力の自己認知、成人のスポーツ参加を強く規定することを報告している。したがって、幼児や児童のスポーツ教室参加の現象を「スポーツへの社会化」モデルで説明するならば、「両親のスポーツ関心および励ましの高い幼児・児童はスポーツ教室に参加する率が高く、また、彼らは競技能力の自己認知と共に、その後のスポーツ役割を習得していく」といえるだろう。

しかし、現在みられる特に幼児のスポーツ教室参加の今日的状況は、必ずしも「スポーツへの社会化」理論がそのまま該当するわけではない。その第一の原因は、子どものスポーツ教室参加に対する両親の積極的すぎる関与であり、しかも、その理由がスポーツやスポーツ教室がもつ心身両面への効果を期待したものであるからである。それはスポーツの内在的価値を認めたものではなく、学習塾やお稽古事と同様に、両親の教育熱の一つの表われともみられる。そ

れ故、「スポーツへの社会化」理論とは逆に、幼児・児童のスポーツ教室参加者は、加齢と共に勉強等の理由で減少する傾向が一般的である。そして、小学校高学年頃から、一部の素質を持った子どもにとって、前述の「スポーツへの社会化モデル」が該当する状況に入っていくようである。

この現象からみれば、今日の幼児のスポーツ教室参加のメカニズムは、まさに現代の社会状況をその背景に持っていることから、単にスポーツへの社会化あるいは動機づけという理論だけでは満足は得られない。確かに、スポーツに対する関心や意識の高い両親は子どもに対しスポーツへの働きかけを相対的に強く持つことが考えられる。したがって、幼児・児童のスポーツ教室参加のメカニズムは、一方でスポーツへの社会化という側面と、他方で両親の子どもに対する様々な期待、特にその表われである教育熱という2つの側面からアプローチする必要がある。そこで、このような研究の基礎資料を得るため、次のような視点から、幼稚園児父兄を対象に調査を実施した。

- (1) 両親のスポーツ関心；特に現在のスポーツ参与と過去の運動部所属経験
- (2) 幼児のスポーツ教室参加の実態
- (3) 両親の教育熱；幼児のスポーツ教室以外の塾・稽古事の参加率およびその日数、さらに、家庭内での教育担当役割と両親の教育観

これらの項目には地域差がみられると予想されたので、調査は大都市（東京・赤羽）、大都市周辺地域（埼玉・大宮）、地方都市（仙台）の3ヶ所で行なった。今回は、これらの実態調査の結果について、特に地域的な比較を中心に報告し、両親のスポーツ関心および教育熱を説明変数とする幼児のスポーツ教室参加のメカニズムに関しては第2報で行なう。

## 1. 調査方法

調査は赤羽、大宮、仙台の3ヶ所、それぞれA・B・C幼稚園の5・6歳児(年長児)および4・

5歳児(年中児)の両親に対し、質問紙による配票調査によって、昭和57年9月に実施した。有効回収標本数(率)は、A幼稚園271(96.4%) B幼稚園163(83.6%)、C幼稚園159(81.1%)全体で593(88.4%)であった。

## 2. 結果と考察

(1) 調査対象家族の人口統計的、社会的属性  
幼稚園児を持つ父兄およびその家族は、現在の日本の社会経済的状况からみて、人口統計的側面はもとより、社会的地位や経済的狀態においても、ほぼ一様化の傾向がみられると考えられる。

調査対象父兄の平均年齢は、父親36.2歳、母親33.1歳である。また、家族構成では核家族世帯が全体で約7割をしめ、子どもの数は2人が約65%であった。これらの項目には、ほとんど地域差はみられず、現在のわが国の一般的な家族形態、子ども2人の核家族世帯、という特徴がここでも得られた。

表1は、3幼稚園別にみた、両親の学歴、職業および世帯の年間所得である。

学歴、職業、年間所得を指標とする社会経済的な達成地位は非常に高いことがわかる。これらの項目で若干の地域差がみられるが、これらはその地域の特徴を表わしているものと思われる。A地域は古くからの商業地域で自営業もかなり多く、また年間所得も非常に高い。B地域は大宮市郊外の新旧住民の混在地域で、学歴が他の2幼稚園と比べ父親・母親共に低く、それぞれの項目で多様性が伺える。また、C地域は仙台市郊外の新興住宅地域で給与生活者が大部分を占め、学歴、職業で高い地位の人々が多い。母親は大部分が専業主婦であった。一般的に父兄の達成地位は高く、上流および中流階層にほとんどの人々が含まれている。

このような高い社会経済的な背景を持つ両親は、自らの運動部経験やスポーツ参与、および子どもの教育熱に関し、かなり高いものを持っていると予想される。

- (2) 両親のスポーツ関心

表1 両親の学歴・職業・年間所得

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母 (593)
学 歴	大学卒 53.3%	高校卒 53.9%	高校卒 55.6%	高校卒 66.9%	大学卒 65.6%	高校卒 57.9%	大学卒 50.1%	高校卒 58.5%
	高校卒 37.8	短大・大卒 41.7	大学卒 29.6	中学卒 17.2	高校卒 26.1	短大・大卒 39.0	高校卒 39.6	短大・大卒 33.9
職 業	上層ホワイト カラー層 37.4	主 婦 88.2	上層ホワイト カラー層 37.0	主 婦 81.6	上層ホワイト カラー層 52.2	主 婦 86.2	上層ホワイト カラー層 41.3	主 婦 85.8
	ホワイト カラー層 30.7	自 営 業 4.8	ホワイト カラー層 29.0	自 営 業 5.5	ホワイト カラー層 35.0	ホワイト カラー層 4.4	ホワイト カラー層 31.4	自 営 業 4.7
	自 営 業 24.1		自 営 業 20.4		自 営 業 6.4		自 営 業 18.3	
年 間 所 得	450万～ 45.4		350万～450万 36.8		250万～350万 33.3		450万～ 34.6	
	350万～450万 28.0		250万～350万 29.4		450万～ 26.4		350万～450万 29.5	
	250万～350万 19.9		450万～ 24.5		350万～450万 24.5		250万～350万 26.1	

(注) 上層ホワイトカラー層（管理職，専門技術職，公務員，教員など）  
ホワイトカラー層（事務職，サービス業など）

両親のスポーツ関心を，単なるスポーツに対する愛好度や関心度からではなく，現在のスポーツ参加および過去の運動部経験から調査した。

a) 両親のスポーツ参加の実態

両親のスポーツ参加を，Kenyon<sup>1)</sup>やSpreitzer<sup>8)</sup>に従って，参加の3つの次元から調査した。すなわち，①スポーツ参加の行動的次元，②スポーツ参加の認知的次元，③スポーツ参加の感情的（態度）次元，である。行動的次元では直接的なスポーツ参加（現在の運動実施頻度）を，認知および感情の次元は Spreitzer らの質問項目によって測定した。

表2の結果から，従来の調査結果<sup>3)</sup>同様，運動実施頻度は男性（父親）の方が女性（母親）よりも明らかに高い。平均および標準偏差値は「クラブに所属している」「定期的に参加している」の2グループに3点，「時々する」グループに2点，「行事の時だけ」「ほとんどしない」の2グループに1点を与え，運動実施を数量化

したものである。各幼稚園の平均値の差に関し，父親の場合，幼稚園間に有意な差はみられなかったが，母親の場合，A幼稚園とB・C幼稚園の間に有意な差がみられた。その理由の1つとして，大都市地域にあるA幼稚園内外のスポーツ参加の好条件によるものと思われる。

表3-1から表3-3は，両親の認知的側面でのスポーツ参加の実態である。認知的側面，（今回の調査項目ではスポーツとの間接的な接触機会を尋ねたものだが）は，日本の社会的な慣習や生活様式から，女性はどの項目とも極端に低い値を示している。また，ほぼ，どの項目とも，さらに男女ともに，A・B・C幼稚園の順で認知面でのスポーツ参加は高い。これは対象者の社会的属性よりも，むしろ，大都市地域程スポーツ情報が豊かでそれに接する機会も高いことを示す結果であると思われる。表4は，これら3項目についてそれぞれ段階ごとに，第1，第2項目では4点から1点まで，第3項目では2点1点を与え，個人の認知的スポーツ参加を

表2 両親の運動実施頻度

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母(593)
クラブに所属して定期的に行っている	13.3%	19.6%	21.0%	12.3%	14.0%	9.4%	15.6%	14.8%
定期的に行っている(週1~2回)	12.6	10.3	6.8	3.1	11.5	5.0	10.7	6.9
時々する(月に1~2回)	28.1	11.8	21.0	4.9	33.1	15.7	27.5	11.0
運動会等の行事の時だけ	15.2	14.4	24.1	29.4	11.5	23.3	16.6	20.9
ほとんどしない	30.7	43.9	27.2	50.3	29.9	45.9	29.5	46.2
不 明						0.6		0.2
M	1.80	1.72	1.77	1.36	1.84	1.45	1.80	1.55
s	0.825	0.897	0.860	0.734	0.805	0.736	0.829	0.828

表2-2 運動実施に関する平均値の差の検定

	A	B	C
A	—	—	—
B	※※※	—	—
C	※※	—	—

右上…父親 ※※※ P<0.001  
 左下…母親 ※※ P<0.01

数量化したものである。この結果、その平均値は男女ともA・B・C幼稚園の順で高く、特にA・C幼稚園間に明らかに有意な差がみられた。

感情的次元でのスポーツ参加は、2つの質問項目（「スポーツからは満足度を少しも得ることはない」「スポーツをすることは時間のむだである」）に対するリッカート式の態度測定によって行なった。それぞれ「まったくその通りである」から「まったく反対である」までの5段階尺度の回答に1点から5点までを与え、両得点の和を回答者の感情的次元での得点とした。

表5が幼稚園別の両親の感情的スポーツ参加の得点、および、無回答の者を除いたそれぞれの平均値である。スポーツに対し大部分の者が好意的・肯定的な感情、態度を持っている。弱い否定を含めスポーツに対し否定的な態度を表明した者は全体で13名（1%）であった。また、他のスポーツ参加の次元とは対照的に男女差はほとんどなく、各幼稚園の父親、母親の平均も近似している。これは配偶者間で、一方のスポーツに対する態度が他方に影響を与え、相互に補強し合う結果であると思われる。幼稚園間の平均では、男女共にC・A・B幼稚園の順に高く、特にC・AとB幼稚園との間に有意な差がみられた。これは恐らく、学歴および運動部経験の相違からくるものと思われる。

b) 両親の運動部所属経験

過去の運動部経験は、スポーツの価値や規範を内面化する機会として、現在のスポーツ参加、特に感情（態度）のレベルに強く影響を与えるものと考えられる。また、丹羽ら<sup>6)</sup>は①女子大生のスポーツ参加率は、運動部経験期間が長い程高い、②スポーツ実施度を規定する要因

表3—1 「新聞のスポーツ欄をどの程度読みますか」

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母(593)
ほとんど すみずみまで読む	42.6%	1.5%	34.6%	3.1%	35.0%	3.1%	38.4%	2.4%
だいたい読む	40.4	17.3	42.0	14.7	36.9	9.4	39.9	14.5
目を通す程度	12.6	50.9	19.1	49.7	21.7	44.7	16.8	65.8
ほとんど読まない	4.4	30.3	4.3	32.5	6.4	42.8	4.9	34.2

表3—2 「会社や家庭での会話の中で、スポーツに関する話題はよくできますか」

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母(593)
非常によくでる	36.7%	11.1%	23.5%	4.9%	30.6%	8.2%	31.4%	8.6%
時々でる	41.1	34.7	45.1	32.5	36.3	26.4	40.9	31.9
たまにでる	17.0	35.8	25.3	39.9	26.1	40.3	21.7	38.1
めったにでない	5.2	18.5	6.2	22.7	7.0	24.5	5.9	21.2
不 明						0.6		0.2

表3—3 「スポーツ雑誌やスポーツ新聞を定期的に購読していますか」

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母(593)
は い	40.7%	8.1%	39.5%	8.6%	12.7%	1.9%	32.9%	6.6%
いいえ	59.3	91.9	60.5	91.4	87.3	98.1	67.1	93.4

としては、「運動部経験」要因が最も強い、ことを報告している。さらに、過去の運動部経験は感情や行動のスポーツ参加の面ばかりでなく、そこに表われない欲求や嗜好などのスポーツ関心に強く影響を与えるものと思われる。

表6は両親の運動部所属経験を示したものである。調査対象父兄の運動部所属経験は全体で

父親73.3%、母親60.9%と非常に高い。しかし、所属別にみると母親の経験者の約45%は中学校だけの経験で終わっている。運動部経験率、所属期間ともに父親がかなりまさっていることがわかる。地域別にみると、若干の差ではあるが男女とも経験率はA・C・B幼稚園の順で高い。また、C幼稚園の父親は他に比べ、高学歴

表4 両親の認知的スポーツ参加の得点

得点	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (158)	父 (589)	母 (592)
10	49 (18.1%)	1 (0.4%)	15 (9.3%)		7 (4.5%)	1 (0.6%)	71 (12.1%)	2 (0.3%)
9	49 (18.1)	4 (1.5)	27 (16.7)	4 (2.5%)	34 (21.7)	2 (1.3)	110 (18.7)	10 (1.7)
8	49 (18.1)	17 (6.3)	37 (22.8)	3 (1.8)	27 (17.2)	7 (4.4)	113 (19.2)	27 (4.6)
7	68 (25.2)	40 (14.8)	29 (17.9)	23 (14.1)	32 (20.4)	6 (3.8)	129 (21.9)	69 (11.7)
6	26 (9.6)	63 (23.2)	33 (20.4)	38 (23.3)	23 (14.6)	38 (24.1)	82 (13.9)	139 (23.5)
5	17 (6.3)	58 (21.4)	13 (8.0)	38 (23.3)	22 (14.0)	36 (22.8)	52 (8.8)	132 (22.3)
4	7 (2.6)	58 (21.4)	7 (4.3)	34 (20.9)	5 (3.2)	39 (24.7)	19 (3.2)	131 (22.1)
3	5 (1.9)	30 (11.1)	1 (0.6)	23 (14.1)	7 (4.5)	29 (18.4)	13 (2.2)	82 (13.9)
M	7.7	5.4	7.3	5.2	7.0	4.9	7.4	5.2
s	1.708	1.501	1.629	1.453	1.779	1.463	1.727	1.486

表4-2 認知的スポーツ参加に関する平均値の差の検定

	A	B	C
A		※	※※※
B	—		—
C	※※※	—	

右上…父親 ※※※ P<0.001  
 左下…母親 ※ P<0.05

での所属が高いと言える。平均所属期間は表明された学校期間にすべて所属していたとみなした場合の平均値である。この値から経験期間は男女で約1年の差があった。地域的には男女ともA・C・B幼稚園の順で経験期間が長く、統計的に父親のA—B間には明らかな差が、父親のC—Bおよび母親のA—B間にはわずかな差がみられた。

以上、現在のスポーツ参加、過去の運動部所属経験から、幼稚園児父兄のスポーツ関心を探ってみた。その結果、スポーツ関心は全般的に非常に高いと言える。父親、母親間では感情面でのスポーツ参加にはほとんど差はみられないが、他の項目ではすべて有意な差がみられた。また、地域的な平均値の差では、男女共に認知面でAとCに、感情面でC—B、A—B間に、さらに、母親の運動実施の項目ではA—C、A—B間に、父親の運動部経験期間でA—B間に、それぞれの幼稚園間で有意な差がみられた。これらから、スポーツ関心は父親の方が高く、地域的には、認知面を除いて、ほぼA・C・B幼稚園の順に高いという傾向を指摘できる。

(3) 幼児のスポーツ教室参加の実態

本調査対象幼児のスポーツ教室参加率は全体で33.7%であった。その幼稚園別、性・年齢別内訳が表7である。

表7から、地域別では3幼稚園間に明らかな

表5 両親の感情的スポーツ参加の得点

得点	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母 (593)
10	183 (67.8%)	169 (62.4%)	81 (50.0%)	74 (45.4%)	113 (72.0%)	105 (66.0%)	377 (64.0%)	348 (58.7%)
9	20 (7.4)	30 (11.1)	27 (16.7)	26 (16.0)	18 (11.5)	29 (18.2)	65 (11.0)	85 (14.3)
8	34 (12.6)	40 (14.8)	19 (11.7)	25 (15.3)	10 (6.4)	11 (6.9)	63 (10.7)	76 (12.8)
7	11 (4.1)	9 (3.3)	8 (4.9)	10 (6.1)	8 (5.1)	5 (3.1)	27 (4.6)	24 (4.0)
6	12 (4.4)	16 (5.9)	21 (13.0)	20 (12.3)	6 (3.8)	7 (4.4)	39 (6.6)	43 (7.3)
5	2 (0.7)		2 (1.2)	3 (1.8)			4 (0.7)	3 (0.5)
4				2 (1.2)				2 (0.3)
3								
2	2 (0.7)						2 (0.3)	
不明	6 (2.2)	7 (2.6)	4 (2.5)	3 (1.8)	2 (1.3)	2 (1.3)	12 (2.2)	12 (2.0)
M	9.26	9.24	8.84	8.67	9.45	9.40	9.20	9.13
s	1.352	1.192	1.491	1.585	1.076	1.055	1.343	1.310

表5-2 感情的スポーツ参加に関する平均値の差の検定

	A	B	C
A		※※	—
B	※※※		※※※
C	—	※※※	

右上…父親 ※※※ P<0.001  
 左下…母親 ※※ P<0.01

差がみられ、大都市地域程その参加率は高くなっている。性・年齢別については、年長児の場合男女差はほとんどないが、年中児では男子がまさっている。年齢別では年長児の参加率は年

中児よりはるかに高い。また、参加幼児のなかには2種類以上のスポーツ教室に通っている子どもも全体で12.5%おり、A幼稚園14.7%、B幼稚園13.0%であったが、C幼稚園の参加幼児はすべて1種類であった。スポーツ教室の形態別ではスイミングスクールが圧倒的に多く、全体で61.6%を占めていた。

この結果から、幼児のスポーツ教室参加にみられる年齢および地域による明らかな差の傾向が指摘できる。すなわち、地域的比較という今回の集計処理からみれば、幼児のスポーツ教室参加は大都市地域の年長児程高いとすることができる（A幼稚園の年長児の参加率は62%であった）。

(4) 両親の教育熱

表6 両親の運動部所属経験および平均所属期間

		A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
		父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母 (593)
運動部経験なし		66 (24.4%)	96 (35.4%)	52 (32.1%)	71 (43.6%)	39 (24.8%)	65 (40.9%)	157 (26.7%)	232 (39.1%)
運動部経験あり		204 (75.6)	175 (64.6)	110 (67.9)	92 (56.4)	118 (75.2)	94 (59.1)	432 (73.3)	361 (60.9)
所 属 別 経 験	中学のみ 所 属	22.1%	41.1%	28.2%	55.4%	19.5%	43.6%	22.9%	45.4%
	高校のみ 〃	12.7	11.4	18.2	8.7	20.3	12.8	16.2	11.1
	中高共 〃	42.2	35.4	40.0	33.7	31.4	36.2	38.7	35.2
	中高大共 〃	14.7	5.7	4.5	1.1	20.3	3.2	13.7	3.9
	中大・高大大のみ 〃	7.8	5.7	7.3		8.5	2.1	7.9	3.3
	所属不明	0.5	0.6	1.8	1.1		2.1	0.7	1.1
所 属 期 間	N	203	174	108	91	118	92	429	357
	M	5.87	4.61	4.76	4.10	5.53	4.39	5.33	4.43
	s	1.987	1.981	1.909	1.557	2.633	1.791	2.347	1.840

表6-2 運動部所属期間に関する平均値の差の検定

	A	B	C
A		※※※	—
B	※		※
C	—	—	

右上…父親 ※※※ P<0.001  
 左下…母親 ※ P<0.05

両親の教育熱という質的な変数を測定することは非常に困難であるが、具体的明示的な「目に見えるもの」と抽象的内面的な「目に見えないもの」という分類からアプローチできるであろう。そして、一般的には「目に見える」部分をもって、いわゆる「教育ママ」に象徴されるように、その教育熱の程度を測っているようで

ある。今回は、前者の視点から両親の子どもへの教育投資を、具体的には、①幼児のスポーツ教室以外の塾やお稽古事への参加、②スポーツ教室を含めたお稽古事などに通う日数、を調査した。後者の視点からは、③両親の教育観、および、補足的に、④家庭内における子どもの教育担当役割を調査した。

a) 子どもへの教育投資

表8は、幼児のスポーツ教室以外の塾やお稽古事などへの参加率である。スポーツ教室参加の場合と同様にA・B・C幼稚園の順に高い参加率がみられた。また、性・年齢別では同年齢で女子の方が高く、年齢別では年長児が明らかに高かった。

表9は、スポーツ教室を含めたお稽古事などへの参加日数、および、不明者を除き「なし」から「週3日以上」の回答に1点から4点を与えた時の平均値である。これは、幼稚園以外の



表7 幼児のスポーツ教室参加状況

	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	年長児		年中児		全体 N=593
	N=271	N=163	N=159	男(148)	女(142)	男(136)	女(167)	
あり	47.6%	28.2%	15.7%	41.9%	40.8%	31.6%	22.2%	33.7%
なし	52.4	71.2	83.6	58.1	59.2	67.6	77.2	65.9
不明		0.6	0.6			0.7	0.6	0.3

表8 幼児の塾、お稽古事の参加状況

	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	年長児		年中児		全体 N=593
	N=271	N=163	N=159	男(148)	女(142)	男(136)	女(167)	
あり	40.6%	36.8%	28.3%	35.1%	57.0%	22.1%	31.1%	36.3%
なし	59.4	62.6	71.1	64.9	43.0	77.2	68.3	63.4
不明		0.6	0.6			0.7	0.6	0.3

表9 スポーツ教室・お稽古事などへの参加日数

	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	年長児		年中児		全体 N=593	
	N=271	N=163	N=159	男(148)	女(142)	男(136)	女(167)		
なし	32.5%	42.9%	61.0%	37.8%	25.4%	55.1%	52.7%	43.0%	
週1日	21.8	35.6	27.0	28.4	29.6	19.1	29.9	27.0	
週2日	24.7	13.5	8.8	22.3	24.6	12.5	10.8	17.4	
週3日以上	19.9	6.7	2.5	10.8	20.4	11.8	4.8	11.6	
不明	1.1	1.2	0.6	0.7		1.5	1.8	1.0	
教育投資 の 平均値	N	268	161	158	147	142	134	164	587
	M	2.32	1.84	1.53	2.06	2.40	1.81	1.67	1.98
	s	1.133	0.908	0.763	1.022	1.079	1.065	0.859	1.040

教育機関へ子どもを通わせるという面からの教育投資を数量化し、幼稚園間の全体としての比較を行なう目的でなされた。表7、表8の結果から当然の事ではあるが、参加率、参加日数と

もに、明らかにA・B・C幼稚園の順に高いことがわかる。そして、3幼稚園の平均値間にはそれぞれ明らかな有意の差 ( $P < 0.001$ ) がみられた。

この2つの調査結果から、子どもへの教育投資という側面での両親の教育熱は、地域別にみると明らかに大都市地域程高い。このことは両親の学歴や職業、年間所得という社会経済的な理由よりも、むしろ、その地域全体の教育熱の高さと、そのことと相補的な関係にあると思われるが、教室や塾などの便益性、招致性という

理由から最もよく説明できるであろう。

b) 両親の教育観

教育投資の高さ、いわゆる「教育熱」は両親の教育観の相違によるものであろうか。表10および表11は、両親の教育観と、子どもの教育は誰の考えが中心となっているかという家庭内での教育担当役割についての結果である。両親の

表10 両親の教育観

	A 幼稚園		B 幼稚園		C 幼稚園		全 体	
	父 (270)	母 (271)	父 (162)	母 (163)	父 (157)	母 (159)	父 (589)	母 (593)
放任型	28.1%	10.3%	37.0%	14.7%	31.2%	17.0%	31.4%	13.3%
中庸型	55.9	74.5	51.2	69.3	56.7	74.8	54.8	73.2
干渉型	11.5	12.9	9.9	14.1	9.6	7.5	10.5	11.8
不明	4.4	2.2	1.9	1.8	2.5	0.6	3.2	1.7
M	1.83	2.03	1.72	1.99	1.78	1.91	1.78	1.98
s	0.621	0.488	0.636	0.544	0.609	0.489	0.622	0.506

表11 家庭内における教育担当役割

	A幼稚園 N=271	B幼稚園 N=163	C幼稚園 N=159	全 体 N=593
父 親	9.6%	6.7%	5.7%	7.8%
母 親	27.7	38.0	30.8	31.4
両親同程度	60.9	54.0	61.0	59.0
そ の 他			1.3	0.3
不 明	1.8	1.2	1.3	1.5

教育観については永吉ら<sup>4)</sup>の質問項目を用いた。すなわち、

- ① 放任型＝子どもは、その将来について親がこまかく気をくばってやらなくとも、能力に応じてのびてゆくものである。

- ② 中庸型＝子どもの将来については、親は常に気をくばるべきだが無理をしてはいけない。

- ③ 干渉型＝子どもの将来のためにも、親は積極的に気をくばって、子どもの才能をひきだしてやるべきだ。

両親の教育観では、この種の質問に対して最も回答しやすい中庸型が男女とも半数以上を占めた。今回の調査では、永吉らの結果と比較して、父親の放任型が非常に高く、また男女ともに干渉型が非常に低かった。このことは、一方がスイミングスクール参加の幼児、児童の母親を対象としたものであるのに対し、今回は一般の幼稚園児の父兄であったこと、さらには、質問内容の言葉のとらえ方等で回答しづらいことなどがその原因と思われる。そのなかで、地域的には、放任型でB幼稚園の父親、C幼稚園の母親が高く、干渉型ではA幼稚園の父親、B幼

幼稚園の母親に高い結果が出た。干渉型の割合だけをみると、C幼稚園が父親、母親ともに他2園に比べ最も低かった。しかし、不明者を除き、放任型、中庸型、干渉型にそれぞれ1点から3点を与えた各幼稚園父兄の平均値をみるならば、A幼稚園が男女ともに若干高い値であるが、母親のAとC間にわずかな差( $P < 0.05$ )がみられる以外は統計的に有意の差はみられなかった。父親、母親間では明らかな差( $P < 0.001$ )がみられ、母親の積極性が伺える。

教育担当役割は、両親同程度が最も多いが、母親中心の家庭もかなり多い。それに対し、父親中心は極端に低く、教育役割の母親中心性が伺える。地域的には、A幼稚園の父親、B幼稚園の母親が他園に比べ多く、教育観の干渉型と同じ傾向であった。

両親の教育熱を以上の2つの側面から探ってみたが、教育投資の側面では大都市地域程教育熱は高いと言える。しかし、各幼稚園全体としての両親の教育観には地域的な差はほとんどみられず、今回の集計処理の段階では、教育投資の違いを教育観からは説明することはできない。また、子どもの教育に関する母親の役割は非常に大きく、スポーツ教室入会の際にも母親の関与が強く働いていると予想される（実際に、「体操教室」参加父兄に対する別の調査では、入会を最も強く勧めたのは母親で68.4%であった）。

### 3. まとめ

幼児のスポーツ教室参加のメカニズムを両親の影響という枠組の中で考察するため、両親のスポーツ関心および教育熱を調査した。そして、今回は特に両性間と地域的な比較を中心にデータを処理し、次のような結果が得られた。

1) 幼児のスポーツ教室参加は大都市地域程高く、明らかに地域的な差がみられた。この地域的な傾向は、塾やお稽古事など子どもへの両親の教育投資の傾向と同じであった。

2) 両親のスポーツ関心では、認知面でのスポーツ参加に前述の地域的な傾向がみられた。し

かし、他の調査項目に関しては、地域という変数よりも学歴や運動部経験など他の説明変数の影響による相違が大きいと思われる。

3) 父親、母親の両性間では感情面でのスポーツ参加以外、調査項目すべてに明らかな差がみられた。そして、スポーツ関心では父親が、子どもの教育面での積極性では母親がそれぞれ優位であった。

以上の結果から幼児のスポーツ教室参加は、より直接的には両親のスポーツ関心よりも、地域および教育投資としての両親（特に母親）の教育熱に強く規定されていると言える。しかし、両親のスポーツ関心は、過去の運動部経験や現在の直接的スポーツ参加如何に拘らず、子どものスポーツ教室参加に潜在的な承認を与えるものであろう。今後、この見地からデータを処理する必要がある。最後に、大都市地域程、スポーツ教室参加を含めいわゆる幼児に対する「教育熱」が高い、という図式は、両親特に母親の意識の高さもさることながら、逆にその地域の子どものとりまく物理的社会的環境の悪化を物語っていると言える。そうであるとすれば、これら子どもの生活圏に対する配慮・改善こそ、現代およびこれからの社会に課せられた一つの大きな課題であると思われる。

### 参考文献

- 1) Kenyon, G. S., "Sport Involvement: A conceptual go and some consequences thereof", In *Sociology of Sport*, Gerald S. Kenyon (Ed.), Chicago: The Athletic Institute, 1969, pp. 77-84.
- 2) Keryon, G. S., "The Use of Path Analysis in Sport Sociology with Special Reference to Involvement Socialization", *International Review of Sport Sociology*, 5: 191-203, 1970.
- 3) 内閣総理大臣官房広報室「体力・スポーツに関する世論調査」1979.
- 4) 永吉宏英, 塚本真他「幼児, 児童のスポーツ参加の社会的背景」, 体育社会学研究会編『スポーツ参加の社会学』, 道と書院, 1977, 101-121頁.
- 5) 西野泰広他「ラグビー・スクールの入校動機と,

- 効果意識に関する研究」, 体育学研究, 23—3 : 263—274, 1978
- 6) 丹羽劭昭, 長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」, 体育学研究, 23—2 : 109—119, 1978.
- 7) Snyder, E. E. and Spreitzer, E., "Family Influence and Involvement in Sports", The Research Quarterly, 44—3 : 249—255, 1973.
- 8) Spreitzer, E. and Snyder, E. E., "Socialization into Sport: An Exploratory Path Analysis", The Research Quarterly, 47—2 : 238—245, 1976.
- 9) 上柿和生「スポーツ塾の明と暗」, 体育科教育, 27—1 : 37—39, 1979.

## Sport Participation of Preschool Children and Parents Influence (1)

—On its regional comparison judging from parents' interest in sport and their educational eagerness—

Tomio MARUYAMA

The purpose of this study was to investigate the regional tendency of preschool children's participation in sport-school through parents influence variables. For this purpose, (i) parents' interest in sport, (ii) the rate of sport-school participation of preschool children, and (iii) parents' educational eagerness, were measured.

The survey was conducted by questionnaire method to parents (father 589, mother 593) of three kindergartens at Tōkyo (Akabane), Saitama (Ōmiya), Miyagi (Sendai). The results were as follows:

(1) The degrees of sport-school participation of children and their parents' educational investment were higher in proportion to its region size.

(2) The parents' interest in sport was not explained by the regional differences except for cognitive involvement in sport.

(3) Between both sexes, there were significant differences at all items except for affective involvement.

From the above results, it seems that sport participation of preschool children was more related to the degree of the parents' (especially mother's) educational eagerness than that of their interest in sport.